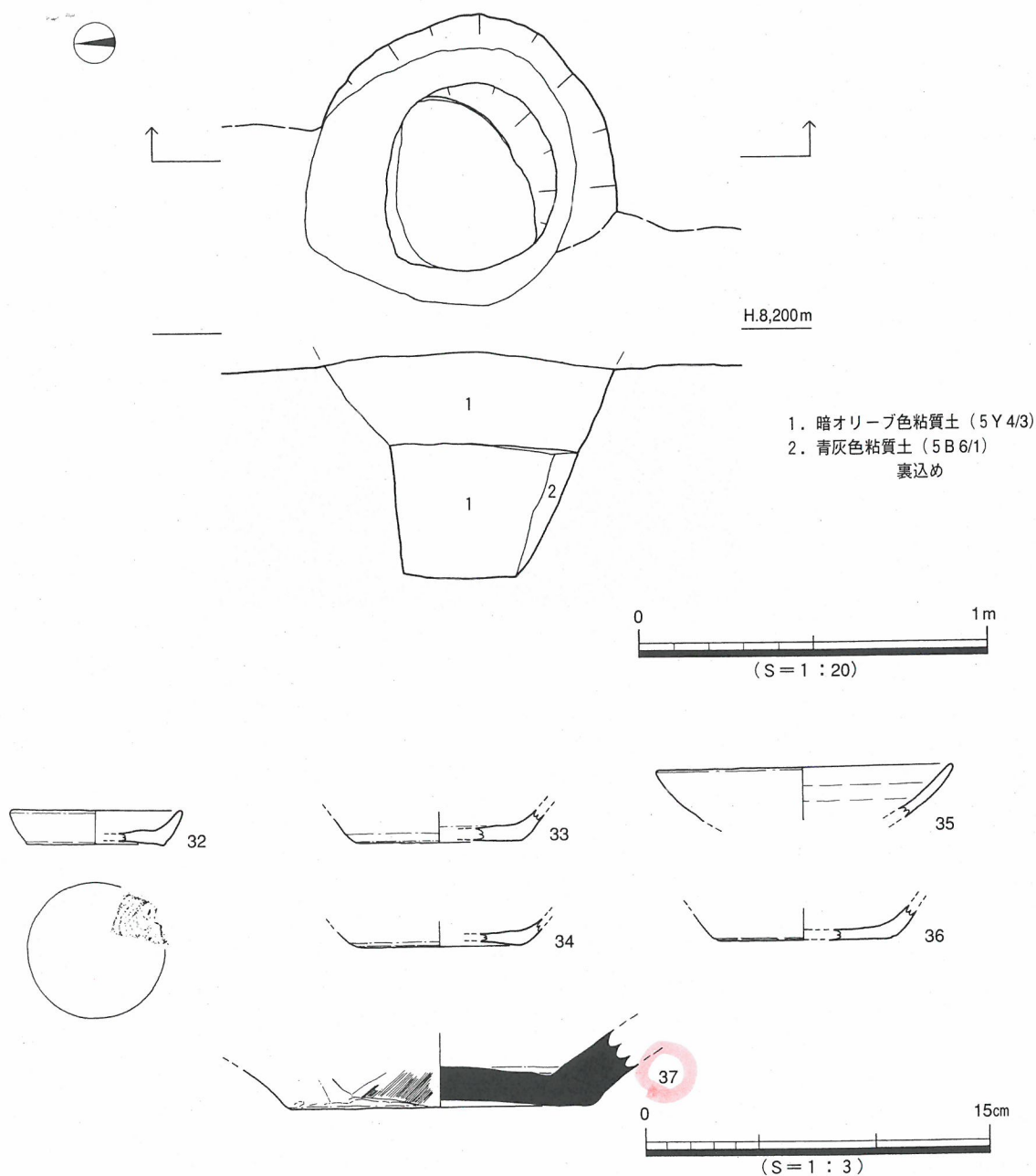
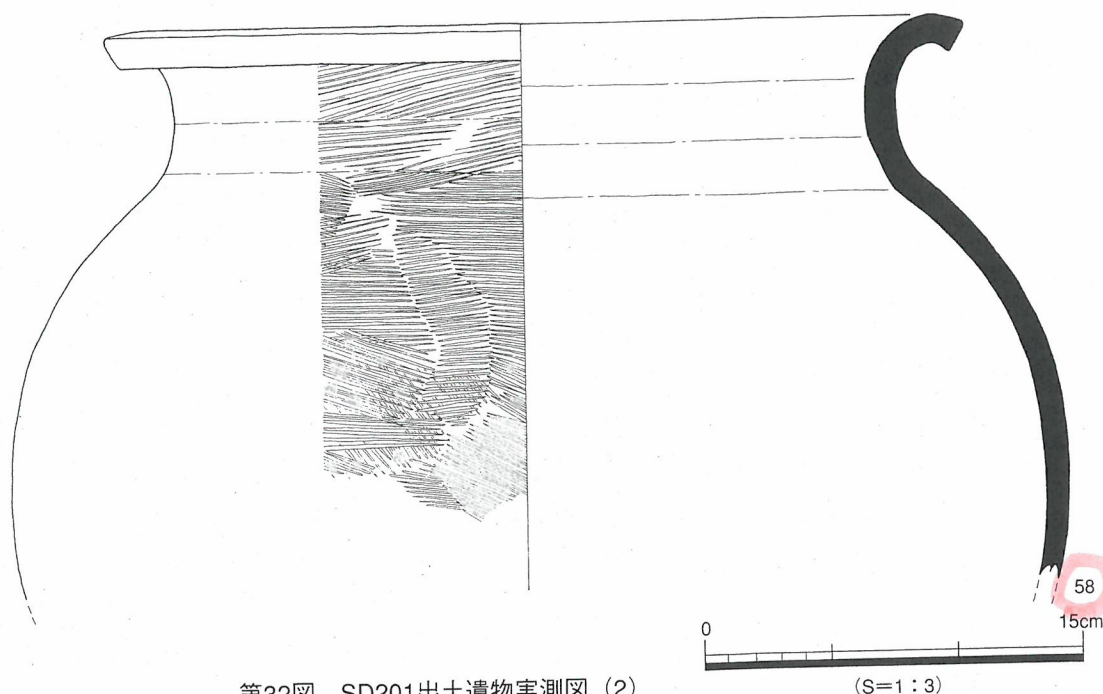




第27図 SE302測量図及び出土遺物実測図

遺物は、3層から土師器の皿・坏・三足付羽釜のほかにモモ核1点が完存で出土した。土器は碎片のため図化できない。

時期：遺物と遺構配置から14世紀代と想定しておく。



第32図 SD201出土遺物実測図 (2)

出土遺物 (第31・32図、図版18・19)

40~50は土師器である。40は皿で、口縁部を欠く。外底には糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕が残る。41~50は坏である。外底は糸切りの切り離し痕と板目状の圧痕を残すものが多い。45は口縁部の直下が若干厚く、胴下半がわずかに内湾しながらすぼむ。胎土は他に比して良好であり、混和材が少ない。46は比較的厚いつくりである。胴部の立ち上がりは急で、碗に近い形状である。51は土師質の土鍋である。口縁部を指で屈曲させるために、内面には稜線が巡る。52は土師質の三足付きと考えられる羽釜である。口縁部は内湾し、タガは口縁部近くに貼り付けられる。53~56は須恵器である。53~55は中世須恵器である。53と54は東播系のこね鉢である。53は口縁端部が上下に大きく拡張され、「く」字状の形態に近い縁帯を形成する。54は口縁端部が上方に拡張される。内面下半は磨滅が著しく認められ、使用頻度が高かったことを示している。55は甕の底部であろうか。復元底径18.8cm。外面は格子叩きの後、一部ナデ消される。56は甕である。口縁部と胴部下半を欠く。埋没過程で流入した可能性が高い。57は鉄器。58は中世須恵器の壺である。扁球形と考えられる胴部に、短くやや内傾する頸部がとりつく。口縁部は短く外反し、端部は面取りがなされる。頸~胴部外面には平行叩きが顕著に残る。内面の遺存は悪く、剥落するところが多い。魚住窯産の可能性はある。

時期：遺物から14世紀前半と考えられる。

S D 202 (第33図、図版5・7)

Ⅱ区北東部のE・F 7区に位置し、南北方向にのびる。S D 201と直交し、溝の南端はS E 201に接続する。規模は、検出長11m、幅0.6~1.6m、深さは10cmを測る。横断面形態は緩やかなU字形を呈する。溝底は北から南へ傾斜し、比高差7cmを測る。埋土は褐灰色土(10Y R5/1)である。

遺物は土師器の坏・土鍋、瓦質の三足付羽釜、東播系須恵器のすり鉢、鉄器、手持ちの砥石が出土している。

付帯施設は柵列S A 201である。柵列は溝北部の西側に構築されており、溝と並行の位置関係にある。